

南方熊楠の和文論文と明治期の日本語

星 薫^{*1)}・雲 藤 等^{*2)}

The difference between Japanese and English articles of Minakata Kumagusu

Kaoru HOSHI, Hitoshi UNDO

ABSTRACT

Minakata Kumagusu was famous as a botanist and a folklorist. In this paper, we discussed the reason why his articles of folklore written in Japanese was not logical compared to his English ones. We concluded that Japanese language in his days apparently lacked the vocabularies and the styles to represent western ideas and logics. He could not present his academic achievement fully in Japanese language, so that he did it mainly in English and wrote only arrays of his massive knowledges in Japanese language.

要 約

南方熊楠は、民俗学に関して英文及び和文による多数の論文を残しているが、両者の性格的相違について、これまで多くの論者が指摘してきている。つまり、彼の英文論文は明確な論理的構成をもった正統的形式であるのに対し、彼の和文論文は話題の飛躍が多く、連想の赴くままに書かれた感が強い。この格差の理由については、従来から様々な解釈が試みられてきてはいるが、これまでのところ十分な説明は得られていない。

本論文では、南方の文章修行の在り方と、彼の活躍した明治期から昭和初期の、日本語の混乱状況に、その理由を見出だそうと試みた。すなわち、彼はその青年期に英国において、英文による文章修行を行っており、英国知識階層から直接の指導を受けていた。一方当時の日本語は江戸時代以来の伝統的文体の解体と、新しい概念を表現するための、言文一致運動の最中であって、未だ論理的内容を十分に表現できるまでに至っておらず、敢えてそれを行おうとすれば、莫大なエネルギーを要したのである。南方は、2, 3の和文論文に関しては、そのような努力を払ったものの、植物学研究を自分の主たる研究領域と考えていた彼にとって、全ての和文論文に同じだけのエネルギーを費やすことは不可能であった。これらのことから、南方は非常に努力を払いつつ和文で論理的文章を書くよりは、英文でのみこれを行い、彼の該博な知識を書き留めておくための手段としてのみ和文論文

*1) 放送大学助教授 (発達と教育)

*2) 三省堂スクール講師

を書くという道を選択したものと思われる。

はじめに

南方熊楠の業績は、植物学と民俗学とにわたっている。このうち植物学に関して彼は、論文として発表していないのだが、民俗学に関しては、多くの英文および和文論文を残している。しかし、以前から「南方熊楠の謎」の一つとして指摘されてきたのが、彼の和文論文と英文論文との性格の違いである。すなわち、彼の和文論文にはおよそ論理的構成というものがなく、話題は彼の連想の赴くままにあちらこちらへと自由気ままに飛躍し、結論らしきものもないままに文章は終わっている。それに対して彼の英文論文では、確実な論理展開が行われており、非常にオーソドックスな論述になっているのである。岩村¹⁾が「(熊楠)は日本語で書く時には、おもしろおかしく調子を落としていた。これに反して彼の英文著作は極めて慎重で、隙がなく、文章もまたすこぶる行儀の良いものである」と指摘する通りである。中には、熊楠の和文論文について、これが断片の寄せ集めの感はあるが、逆にそれが尽きせぬ魅力を秘めていると述べる論者もある²⁾が、「なぜ難渋な日本語論文や書簡と、端正で了解しやすい英語論文を書き分けたのか」という近藤³⁾の疑問は、多くの研究者が共通して感じてきたものであった。その理由については、これまで様々な推測が呈示されて来ている。

益田⁴⁾は、熊楠の主著『十二支考』を例にとって、彼の博識は浪費された知識ではないかとの感想を漏らし、その理由を植物学の研究に精力の大半を注ぐ熊楠の事情と、理論的水準の低かった当時の日本の「土俗学」の状況とに求めている。同様に桑原⁵⁾は、熊楠が結果として目立った理論体系を残さずに終わったのは、日本全体の学問的年齢が若すぎたためではないかと述べている。一方、鶴見⁶⁾は、熊楠が和文論文は大衆向けに、英文論文は学会向けにと対象を意識的に変えて書いていると述べ、和文で学会向けに書かなかったのは、日本の学会を相手にしていなかったためであると指摘する。

さらに、小林⁷⁾は、熊楠の和文論文「トームと命名」を例にとり、彼が和文でも逸脱のない、明確な論理的展開のある文章も書いていることを紹介している。このことから小林は熊楠が論理的な文章を書けなかったのではなく、敢えて書こうとしなかったのだと述べる。なぜ書こうとしなかったのかについて、小林は何も述べていないが、熊楠が和文では書けなかったということであるより、和文で書いてもそれを理解し、適切に評価し得る研究者の存在がほとんど望めなかったため、敢えて書かなかったと考えていたかに思われる。

これに対して、近藤³⁾は、少なくとも柳田国男が要求したレベルで和文論文が書けるだけの力が、熊楠にはなかったのではないかと、そしてそのことが、後の柳田との確執の一因となったのではないかと、推測する。近藤は、精神医学的見地から、熊楠の人格特性にその原因を求めている。

本稿でも、熊楠は和文で論理的文章を書くことができなかったのではないかとする推測を呈示するが、その原因を主に彼の文章修行の在り方と、当時の日本語の混乱状況とに着

目させたいと考えている。

南方熊楠の和文論文

先にも述べたように、熊楠の和文論文の多くは、英文論文と違って「断片の寄せ集め」と評されるほど、論理的構成をもっていない。例えば、彼の主著といわれる『十二支考』（大正3年～12年）は、それぞれの年の干支にちなむ動物の伝説、逸話などについて述べているものであるが、論述が進むにつれ次第にテーマから逸脱してしまうこともしばしばで、虎がテーマの文章であったはずなのに、いつの間にか「藻」の話になってしまうといった例が散見され、「鷺石考」（大正15年）では、本人までもが「話がこう長くなると、読者のみかは、熊楠自身も何だか跡先が分からなくなる」⁹⁾と述べているほどである。

しかし、小林⁷⁾も指摘しているとおり、熊楠の和文論文の全てがこのように逸脱の多い文章であったというわけではない。例えば「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」（明治44年）や「猫一疋の力に憑って大富となりし人の話」（明治45年）といった論文では、英文論文と同様の論理構成をもった文章になっている。その例として「猫一疋の力に憑って大富となりし人の話」の文構成を順に追ってみると、次のようになる。

「猫一疋の力に憑って大富となりし人の話」の構成

まず、冒頭部分では物語（ホイッチングトン物語）の概要が述べられる。この物語は、貧乏なホイッチングトンが、猫をきっかけとして富を得て、さらにロンドン市長にまでなるという貧者の成功物語である。熊楠は、この話の歴史的事実をまずおさえ、さらにイギリスの説話学者であるクラウストーンによる起源研究を紹介する。

すなわち、クラウストーンによればホイッチングトン物語の起源はインドであり、北は蒙古人、南はトルコ人を經由して欧州に伝わったと指摘する。このうちイギリスに流布しているのは北方伝来のものであると推測し、いずれインドでその原話が発見されるだろうと主張する。

これに対して熊楠は、起源とされるインドには現在に至るまでその原話が発見されていなかったが、「一切経」のうちの義浄訳『根本説一切有部毘奈耶』巻32に、その類話を発見したことをまず報告する。発見した類話の概略を述べた後、書かれた時代を考えると、これがペルシアとヨーロッパ諸国に見られる「猫で成金の物語」の原話であることは間違いないと述べる。しかし、ペルシア、ヨーロッパの話では確かに猫が活躍するのだが、熊楠が「原話」とであると主張する「一切経」では、富のきっかけとなった動物は猫でなく鼠になっているのである。この相違について熊楠は、アジアにおける猫と鼠の扱いの違いを、宗教の違いの点から論じ、彼の博識ぶりを披露する。

まず、インドの古法典である「マヌ法典」の中、狡猾な猫が鼠をだまして殺す話を挙げ、猫はざる賢く、鼠は好ましいものと見る例を紹介する。また、仏教では『大勇菩薩分別業報略歴』、『分別善惡所起経』などの例を挙げ、猫が忌み嫌われる存在であったことを指摘する。中国には古代猫崇拜の習慣があったことが『礼記』から分かるが、仏教伝来によって猫を魔物とするようになったと指摘し、『北史』には猫鬼の話が載っていることに言

及する。一方、イスラム教では「回教徒が猫を好遇すること、すこぶる梵教、仏教、拝火教徒に反せるは、所見多し」として、トルコ人が猫を「貞潔温良の獣」とみなしていた話、マホメットが猫を大事にしていたという逸話を紹介し、イスラム教には猫を厚遇する風潮があったと指摘する。再び『仏典』の調査に戻り、鼠が性善なる獣と見なされていたことを証明し、最後に次のように結論付ける。つまり、ホイッチングトン物語の起源はインドにある。もともと仏教の説話として鼠をきっかけとして富を得る話であったものが、伝来の過程でイスラム教の習慣が話を変化させ、ホイッチングトン物語としてイギリスに伝わった時には、猫になっていたというわけである。

このように、「猫一疋の力に憑って大富となりし人の話」では、問題提起、論証、結論が順に述べられており、論理的構成をもった文章になっているのである。論理構成そのものは単純であるが、松居⁹⁾が言うように、熊楠の文化伝播研究は、論理としては単純でも、それを立証するには膨大な古今東西の文献調査と綿密な資料分析が必要であり、大英博物館の研究成果と、彼の傑出した記憶力の賜物と言えるだろう。

このように熊楠は、和文論文においても明らかに論理的構成をもった文章を残している。この点は、小林の主張する通りである。しかし、この論文が発表された明治45年以降の熊楠の和文論文には、若干の例外はあるにしてもこのような論理的展開をもった文章は非常に少ない。その理由を小林⁷⁾の言うように熊楠が意図的に書かなかったと考えるべきなのか、近藤³⁾の指摘のように書けなかったためと考えるべきなのかを知る一つの手掛かりとして、次の資料は重要である。

〔資料①〕

…。右様の次第ゆえ、何とか相当の時間つぶれの料だけは下されずや。もっとも従前ごときちよつとちよつとした資料報告ぐらひは、機会さえあらばいくらでも出し得べきも、ただただひまを潰すばかりで、前後そろつた論文を出すことは、到底自分の職業を幾分損じてまでも、つづけて出すことはむつかしかるべく候。（下線は引用者）¹⁰⁾

〔資料②〕

…。要するに質問の答文や資料報告、また論文というほどのものならぬ（他人の論文や記事に付随する批評半分の）追加文ごときものは、いくらでも書き得、またいつでもできるなり。¹¹⁾

資料①にある「自分の職業」とは、植物学の粘菌研究のことと推測される。また「前後そろつた論文」というのは、彼の英文論文のように論理構成をもった文章のことを指していると考えられる。

熊楠はここで、自分の本職が粘菌研究であり、民俗学研究は片手間のものであること、民俗学に関して現在の状況でできることは短編や他人の論文・記事に対する批評を書くことくらいであり、論理的な文章を日本語で書くことは「ただただひまを潰すばかり（＝時間がかかりすぎる）」ために、敬遠していることが伺われる。この点に、熊楠が論理的な和文論文を積極的に書かなかった理由を求めることができるだろう。しかし、論理的な和文

論文を作成することが、それ程に時間の掛かる作業であった理由はこれらの資料だけからでは、知り得ない。

南方熊楠の文章修行

熊楠の留学中の「日記」によると、彼の外国語習得は徹底しており、最初の1年間は、週日昼間はフランス語とラテン語を一日おきに学習し、夜には毎日英語の書籍を読み、日本語、中国語の書物は日曜日以外は禁欲的に読まないようにするという生活であったという。さらに翌年には、ラテン語は日曜日に学習し、ドイツ語とフランス語を一日おきに勉強することにしたという。もちろん、この間語学の勉強だけをしていただけではなく、英文論文を雑誌『ネーチャー』にたびたび投稿している。これらの語学習得が一段落したところで、熊楠は大英博物館において、各種文献の筆写を開始する。高木敏雄宛書簡によれば、この時期熊楠は大英博物館で辞書と対訳本を利用して18、19か国語を習得したという。¹²⁾つまり熊楠は、大英博物館での文献筆写を始める前に英語の他ラテン語、ドイツ語、フランス語の基礎を集中的に学習し、それが一段落した後に、辞書と習得した英、仏、独、羅語の基礎知識を駆使して、他の多くの外国語を習得したようである。

当時の彼の論文は主に英語で作成されており、明治26年(1893年、熊楠27歳)に、処女論文「極東の星座」を発表して以来、多くの英文論文を発表し続けている。彼がはじめて和文で論文を発表するのは帰国後の38歳の時のことであり、本格的に和文で論文発表を始めるのは実に41歳になってからである。つまり、熊楠は英文を書くことから文章修行を始め、20代から30代前半までの時期には、外国語でしか論文を書いていない。この間の英文修行について南方は次のように言う。

〔資料③〕

非常に苦辛して外国文を練るに、一字を下すとて血を吐くことあり。素より不敏の性質ゆえ決して誇るに足らざる文ながら、英国で毎度その方の雑誌の巻頭へ拙文を出し、また予告をもおけにして、読者に出版を待たしおることもしばしばあり。¹³⁾ (下線は引用者)

〔資料④〕

小生在英のころ、アーサー・モリソンという人と交わり厚し。小生大英博物館で大喧嘩し抛り出されたとき、即日、南ケンシントン美術館へ世話して技手にしてくれた人なり。(中略)この人、平生小生の英文を見、ロンドンにある外人中、貴公ごとく苦辛して英文を書くものはあるまじ(これは小生一文作るに、必ず字書をしばしば見、なるべく同意味の語に異文字を多くつかうなり。かくせざれば長文は人が見あくなり)、今十年も修煉せば大文章家となるべし、マクス・ミュラルなど学問はえらいが、英文は軽忽にかくゆえ、熊楠の文ほど煉れおらずとて、その例を示されし長文の状、今も保存す。これはお世辞として半分に分かれんことを望むとして、(以下略)¹⁴⁾

これら資料に見られるように、熊楠は英文を書く際には、一字もゆるがせにせず、絶え

ず辞書を引いて、同意語にはできるだけ別の語を当てるよう注意している。この時期の英文修行経験を物語る次のようなエピソードがある。

熊楠が最初の論文である「極東の星座」のゲラ刷りを、ちょうど知遇を得たフランクス（考古学者、大英博物館理事）に見てみもらったところ、definite sketchという熊楠の表現を見て、外国人はいくら文章がうまくてもこのようなことがあるため、イギリスの小児ほどにもならないと苦笑されたのだという。SketchとOutlineは、大抵の辞書には同意語として挙げてあるため、それを見てこんな成語を作り出したようだが、辞書だけを頼っているとこのような間違いを犯すことになるのだ。この二語は全く別々の意味のものである。Sketchは、definiteとはならない。definiteと書いた場合は、必ずoutlineとしなければならないと指摘されたのである¹⁵⁾。これは、同じ単語を繰り返し使わないよう苦心してはいるが、辞書の知識だけでは、不十分であるという失敗のエピソードである。このように熊楠は、常に自分の英文を英国人知識階級に批評してもらい、機会あるごとに発表前の論文の添削を頼んでいる。例えば、「ダグラス教授にあふ。ネーチュールに出す文と死人婚嫁の話直してもらふ」（明治29年9月7日『日記』1, p385）、「アーサー・モリソン状一到着。予の過日の状の文直しくれる」（明治31年10月8日）、「アーサー・モリソン氏へ状一出。ネーチュールの予の文、ブゴニア論の校正を頼む」（同10月9日いずれも『日記』2, p74）とある。熊楠は、知遇を得た学者や小説家に、常日頃自分の論文の添削を依頼し、より完成度の高い英文を書くべく、努力を続けていたのである。

一方、彼の日本語に対する姿勢は、次に示す資料群に見る通りである。例えば、柳田国男に宛てた書簡で「小生は日本文は下手の廉をもって」¹⁶⁾と述べ、上松菟宛書簡では、「日本文拙くとも英文少しもましならばそれで自分の志は届きしものなり。（中略）日本文に拙きはその方に志なかりしゆえにて別に遺憾とも思わず」¹⁷⁾などと言う。さらに、この点を明確に述べているのが次の資料である。

〔資料⑤〕

しからば小生は如何というに、小生は日本文に全く望みのなき者にて、今も自分の書く英文には一字一句大家の点を求めおるが、習わぬ経は読めずで、日本文は習いしことなく、最初から0点と断念しおる。¹⁸⁾（下線は引用者）

これらの書簡に表れた熊楠の日本語に対する姿勢は、ほとんど開き直りとも思えるほど、自分の日本文が下手であることを認めている。特に資料⑤では「日本文は習ったことがない」と述べている。英文に関しては先に見たように、多くの英国人学者に校正してもらいながら文章力を鍛えあげていった熊楠だが、日本語に関してはそういう機会がなかったというわけである。

だが、いかに外国留学が長かったとはいえ、日本人であり大学（東京大学予備門）入学まで日本で教育を受けて来ている彼が、これほどまでに日本語に対する劣等感を持った理由を理解するためには、明治から昭和初期までつづく、現代日本語確立までの長い道程と、その途上における言語的混乱とに着目する必要があるだろう。

現代日本語の成立事情

(1) 言文一致運動

樺島¹⁹⁾は、人が文章を書くには社会的に認められた様式に従う必要があり、もしこの様式がないところで文章を書こうとすれば、全く書けないわけではないにしても、書くのに困難を感じ、奇妙な文章が出来上がることになると、指摘している。その具体例として樺島は、若松賤子の『小公子』（明治23～25年）を挙げ、その口語表現について述べている。すなわち、この文章の口語表現をかなりこなれたものと評価しつつも、同じ作品の中で少々込み入った内容を表現しようとする場合、口語体から伝統的な漢文訓読調の表現に戻ってしまっていると指摘する。つまり、日常的な出来事の表現であれば口語体で十分可能であったが、抽象的な内容を述べる場合には、口語体では文章としてかたちを整えるに到っておらず、語彙の点でも不十分であった。口語体のこのような欠点を克服し、感情を表すこともでき、抽象的な内容を表すこともできる汎用的な文章表現を作り上げようとした運動が、言文一致運動であったと樺島は指摘する。

言文一致体とは、話し言葉と書き言葉を一致させようとする文体である。明治初期には、日本語には漢文、和文、漢文訓読体、候文、雅俗折衷体など様々な文体が存在しており、目的に応じ、読者層に応じて書き分けられていた。しかし、これら江戸期以来の伝統的な枠組みでは、新しい西洋の制度、思想、学問などの内容を広く民衆に伝達し、議論するには限界があった²⁰⁾。ここに新たな日本語の文体の創造が必要とされる理由があり、その解答が言文一致体であったわけである。

また、小池²¹⁾は、言文一致運動が文学の運動であるばかりでなく、「国民語」という日本全国に通用する言語を創造するための運動でもあったと指摘する。言文一致が真の意味で言文一致になるには「三人称視点の言文一致表現」と「国民語」である共通語が必要であったとし、それは日本人自らの手で、意識的に作り上げなければならなかったと述べる。

この言文一致運動は、前島密が漢字全廃運動と、かな書き言文一致の文章を提唱した慶応2年（1866年）に始まり、昭和21年（1946年）アメリカ教育使節団の勧告によって、官庁の口語体採用が実現するまでの79年にわたる運動であった²²⁾。つまり、言文一致運動とは、汎用的な日本語を創造しようとする文章表現上の一大革命であったということになる。そして、熊楠の生きた明治から昭和初期までの時期は、江戸時代以来の漢文調の文体から、様々な文体の試行、言文一致運動を経て、新たな日本語のスタイルが構築されるまでの試行錯誤の時期とちょうど重なっていたと言える。この点をより詳しく見るために、言文一致運動の歴史と熊楠の生涯とを併記することで、彼がおかれていた言語環境を検討してみたい。^{**}

^{**}この論述に当たっては、山本正秀『近代文体発生の史的研究』³³⁾と、日本近代文学館（編）『日本近代文学大事典』³⁴⁾の言文一致の項、および『南方熊楠全集』別巻2の「年譜」を参考にした。また、文中の熊楠の年齢は数え年である。

(2) 言文一致運動の展開と南方熊楠の生涯

慶応2年(1866)～明治16年(1883)；言文一致運動の発生期と捉えられている。この時期は、幕末から明治初期の啓蒙思想期にあたり、洋学者や啓蒙思想家、自由民権論者らによって言文一致運動が提唱された時代である。一方熊楠は慶応3年に、和歌山に誕生し、小学生の頃から『訓蒙図彙』、『和漢三才図会』、『諸国名所図会』などの筆写を始めていた。さらに、漢学塾に通ったり、遠藤徳太郎に素読を学んだりして、主に江戸時代以来の伝統的な漢文調の文章を学んでいる。明治16年、和歌山中学卒業後、上京して共立学校に入学し、高橋是清に英語を学ぶ(熊楠数えの17歳)。

明治17年(1884)～明治22年(1889)；言文一致運動の第2期と考えられ、第一自覚期と捉えられている。鹿鳴館時代の欧化主義の風潮を背景に、言文一致運動が本格化し始めた時代である。二葉亭四迷、山田美妙の二人が、明治19年言文一致小説を書き始め、教育界では同年頃から談話体を採用した小学校用国語読本が、出現している。熊楠は、明治17年、東京大学予備門に入学しているが、この時の同期生には後の夏目漱石、正岡子規、山田美妙ら、言文一致運動に深く関わった人々がいる。明治19年熊楠は大学予備門を退学し、翌20年アメリカ留学に出発している(熊楠21歳)。明治21年には雑誌『ネーチャー』の購読を始め、外国語修行が本格化し始めた時期と思われる。

明治23年(1890)～明治27年(1894)；言文一致運動の第3期で、停滞期として区分される。鹿鳴館時代の急進的欧化主義の反動から、国粹主義的風潮が広がり、その影響で明治22年後半からは西鶴調、元禄調雅俗折衷体、森鷗外らの和漢洋調和体、民友社の欧文直訳体、落合直文提唱の新国文(美文)などの非言文一致体が、次々に出現し言文一致運動は著しく後退を余儀なくされた。この時期の熊楠は、このような日本の言語状況とは全く無縁で、明治25年にはアメリカからイギリスへと渡り、英語以外の語学の修得にも意欲的に取り組み、26年には処女論文「極東の星座」を『ネーチャー』に発表していることは、先に述べた通りである。

明治28年(1895)～明治32年(1899)；言文一致運動は第4期に入り、第二自覚期と考えられている。上田万年が現代語重視のヨーロッパ言語学界の新知識を修めて帰国し、日本における標準語制定の必要性から、言文一致文を提唱し、尾崎紅葉が『多情多恨』(明治29年)において「デアル」調言文一致文を完成させている。この時期熊楠は引き続きロンドンに滞在し、明治28年から大英博物館において、精力的に各種文献の筆写を始め、同時に『ネーチャー』、『ノーツ・アンド・クイアリーズ』に論文を発表している。

明治33年(1900)～明治42年(1909)；言文一致運動の確立期とされる。運動はピークを迎え、文学界、教育界ともに、言文一致問題が大きく取り上げられるようになった。また、雑誌『ホトトギス』を中心として活躍した正岡子規・高浜虚子らの写生文によって、簡明な口語文体が確立され、これは言文一致の普及にも貢献したという。また、同誌に掲載された夏目漱石の『我輩は猫である』は、簡潔な文体が支持されて、言文一致体小説への道を開いたと言われる。明治41年には、小説の文章は100%口語体となった。さらに、明治36、37年発行の国定尋常小学校読本には、多くの口語文教材が採用され、全国的に、言文一致体が普及し始める。丁度この頃(明治33年)、熊楠は滞在費が底を尽き、34歳にして帰国する。しばらくは南紀地方の植物調査などに専念するが、明治36年、帰国後ほとんど途絶え

ていた『ネーチャー』、『ノーツ・アンド・クイアリーズ』、特に後者への寄稿を精力的に再開する。明治37年、これまで英文でしか論文を書いたことのなかった熊楠が、はじめて『東洋学芸雑誌』に「ホトトギスについて」他二編の和文論文を寄稿する（熊楠38歳）。同36年には、彼の代表作と言われる英文論文「燕石考」が完成する。この作品には13か国語が用いられているが、月川²³⁾は、「燕石考」の資料収集から執筆にかけての時期が、熊楠の語学力の絶頂期ではなかったかと述べている。さらに、明治38年には、ジキズとの共同訳による『方丈記』が、『王立アジア協会雑誌』四月号に掲載される。

明治43年(1910)～大正10年(1921)；言文一致運動の第6期は成長前期と言われている。この時期に中心的に活躍したのは、白樺派と新現実派の作家達であり、彼等が近代口語文体を完成させた。志賀直哉の『暗夜行路』全編が完成した大正10年頃、小説上の近代口語文体が完成したと言われる。また、この頃から、論文や学術書にも次第に口語体を採用したものが多くなっていく。このころの熊楠は、様々な雑誌に和文の論文を寄稿するようになり、柳田国男との文通も始まっている。明治45年に、雑誌『太陽』に「猫一疋の力に憑って大富となりし人の話」を寄稿し（熊楠46歳）、続いて大正3年には同誌に「虎に関する民俗と伝説」を発表しているが、これは以後大正13年まで11年間にわたって各年の干支の動物についての論考として発表され続ける（いわゆる「十二支考」）。

大正11年(1922)～昭和21年(1946)；言文一致運動第7期であり、成長後期と言われる。大正11年に大新聞の全紙面が、言文一致化し、新聞、雑誌の論説も、その文体の大勢が言文一致文となってくる。また、論文や一般の口語文は、さらに文体が洗練されていく。一方熊楠は、これらの運動とはほとんど無縁のまま、大正14年、矢吹義夫宛に長文の書簡を執筆しているが、これは彼の自伝であり後に「履歴書」として刊行される（『日本人の自伝 13 南方熊楠・柳田国男』平凡社 1981年）。さらに大正15年、『南方閑話』、『南方随筆』、『続南方随筆』を次々刊行する（熊楠60歳）。昭和4年天皇南紀行幸に際し、御召艦長門艦上にて御進講、昭和16年死去。享年75歳。

日本語の未熟さと南方熊楠の和文論文

こうして眺めると、熊楠が生きた時代とは、日本人が共通に使用出来る新たな日本語の表現様式が必要とされるようになり、様々な模索が繰り返されていた時代であったと言える。一応新しい言文一致体は生まれたものの、未だ完成された形ではなく、充分社会的に認められた様式として確立されていたとは、言い難い状況であっただろう。英語による文章表現法を修得していた熊楠にとって、定型を持たず語彙も不足していた当時の日本語による文章表現には、かなり大きな障壁を感じていただろうことは容易に想像できる。次の熊楠の言葉は、そのことをよく表している。

〔資料⑥〕

貴下、小生の「神跡考」を見んことを求めらるるゆえ、訳しておくり申し上げしなり。その訳はむろん英文ほどには成らず、これ英文にはdiction撰字はなはだ自在なるに引きかえ、わが邦の文には撰字はなはだ不自在なればなり。²⁴⁾

英文での執筆に比べ、和文では言葉の選択も言い回しも思い通りにいかず苦勞している様が資料からうかがえる。特に、英文での文章修行から出発している熊楠にとって、当時の日本語は自分の考えを自由に表現するにはあまりにも語彙が不足していて、英文論文の場合のように表現出来ないと感じていたのであろう。

しかし、日本語表現の不自在さを痛感していたのは熊楠だけではない。プロの文章家であり、言文一致体表現の旗手の一人と目される夏目漱石もまた、同様のことを訴えている。

〔資料⑦〕

(前略) 前に現今の文章界には鬭争が行はれて居ると言ったが、其ストラッグルは一般ばかりではなく個人の頭脳中にも渦巻いて居る。だから現今の文筆の士が烈しく煩悶して居るのは尤もだ。従来の和漢の書籍のみ見て、其に満足して居る人々ならば知らず、少しでも泰西の文学でも鑑賞する人は、頭脳は自然と其趣味と一致して居るのに、さて其を形に現はさうとすると文字が足りぬ。即ち頭脳と文字との間には非常な高低が出来て来る、足搔く、階子を掛けやうとする、西洋の文字は豊富だから其儘使はうか？否、々、希臘や羅甸を無暗矢鱈に担廻れば、彼奴術学者だと来る、仕方が無いから大抵に解る英語ぐらゐを混れて置く。其も数があつては困る事となる。因で新熟語を構成へる必要に迫られる。²⁵⁾

自由闊達で、今でも古さを感じさせない漱石の文章であるが、彼もまた日本語の語彙の不足に直面し、如何に文章を構成するかに懊悩していたことが分かる。漱石の言う「頭脳と文字との間には非常な高低が出来て来る」という経験は、まさしく熊楠の経験でもあっただろう。他所で漱石は「私の頭は半分西洋で、半分は日本だ。そこで西洋の思想で考へた事がどうしても充分の日本語では書き現はされない。これは日本語には単語が不足だし、説明法も面白くないからだ、(下略)」²⁶⁾とも述べており、西欧思想を日本語で表現する時に生じる問題が、単に語彙の不足から来るだけでなく、表現様式そのものの不備にも起因することを指摘している。

これと同様のことは、現代の発展途上国でも起こっているという²⁷⁾。すなわち、これらの国々では、大学で使用されているテキストが母国語でなく主に英語やフランス語で書かれており、講義もまた同じ言語で行われている。その理由は、母国語では日常的な出来事の話は出来ても、専門的な内容の表現は語彙不足、表現法不足のために、難しいからであるという。このように見て来ると、当時の日本語の現状の中では、熊楠が英文論文では出来た論理的表現が和文では出来なかったというのは、充分理解出来る。

さらに熊楠の場合、青年期から成人前期にかけての時期を海外で過ごし、日常的にも、学問の上でも、ほとんど外国語ばかりの中で生活しており、急激に変容しつつある日本語の現状とは無縁のまま、13年間を過ごしていた。その間に、苦心して英語の文章修行を行ったものの、日本語に関しては少年時代に学んだ伝統的な漢文調スタイルを一歩も出ていなかったと考えられる。鶴見²⁸⁾は、熊楠の文章スタイルを江戸の洒落本や滑稽文学から学んだものではないかと推測しているが、彼は日本語に関しては生涯この古典的スタイルからあまり進歩しなかったように思われる。例えば次の資料は熊楠が言文一致体の、一般庶民にも分かりやすい文章を書こうとして、その困難さに戸惑っている様子を記している。

〔資料⑧〕

小生は当分「続々南方随筆」の稿本整理にかかりおり候。『続々南方随筆』はずいぶん小生みずから骨折って増補追加し、図書館で多く読まれる新刊書の一となりおり候も、この図書館で多く読まれるということが世に広く読まれざる反影の由、すなわち価が高きに過ぐるなり。故に今年十月ごろまでに出すべきものは、何とか一汎に分かり易きようなるべく漢文を少なくし、なるべく誰にも判るよう和解するの必要を感じ申し候。さて一切和解すると入らぬ文句も入れざるべからず、随って紙数が増し来たり申し候て、この辺の苦辛一方ならず候。²⁸⁾

一般読者向けに、漢文を減らし、いわゆる言文一致文で書こうと試みたこの『続々南方随筆』は、結局完成せず、出版されることはなかった(但し、『全集』には収録されている)。『続々南方随筆』以前に出版されている彼の本(『南方閑話』、『南方随筆』、『続々南方随筆』)では、新しく確立されつつあった言文一致文には頓着せず、また、英文の場合のように読者に配慮した書き方をしようともせず、いわば好き勝手に書いていたのである(資料⑨参照)。

〔資料⑨〕

…、かく申すもの社の方で小生の論文を出すか否かは分かり申さず候。これは小生は世間および箇人に一向斟酌なく種々雑多のことをかきちらすゆえ、社の方で憚りて出さぬこととなるも知れ申さず候。²⁹⁾

熊楠の英文論文に比べて、和文論文や書簡が難渋だと言われる理由の一つはここにあるだろう。また、当時の日本では桑原³⁾や益田⁵⁾が指摘しているように民俗学をはじめ全ての学問分野において、その学問レベルは未だ発展途上の段階にあり、論文を書くに際しても、定型パターンは無いに等しかった。熊楠は、この点に関してもその不便さを次のように嘆いている。

〔資料⑩〕

小生の文なども、欧文はfoot-notesを用い得るゆえ本文の順序は整然たるを失わず。しかるに古ギリシア・ローマの文と同じく、日本には足注を用いて、本文の加勢するに止まるほどの不必要譚を別に付するの方なし。(もっとも支那風のわりこみ注、一行の本文の下に二行にかく方あれど、これも長くなりては本文を忘れおわることあり。古えは支那にこのわりこみ注もなかりしゆえ、『神農本草経』の本文に漢の郡名が出たり、『周礼』の本文に後漢のことが出たりするなり。)³⁰⁾

本文に脚注を付けるといった約束事も、当時の日本では未だ確立されていなかったように、熊楠が英文論文の場合のように順序だてて論述を進めることを阻む、要因の一つになっていた。熊楠の和文論文に飛躍が多い理由の一つをここに求めることもできるのかもしれない。

南方熊楠と一般との知識格差

これまで、主に言葉の問題として、熊楠の和文論文の非論理的表現法について述べて来たが、当時の一般民衆の知的レベルと、熊楠が占有していた高度の知識との間の、埋めようのない格差の大きさについても、指摘しておく必要があるだろう。熊楠は、10年近い年月を費やして大英博物館において当時の日本人が誰も知らなかった膨大な書籍を読みこなし、知識の集積に努めた。彼は、その膨大な知識を駆使して東西の文化比較を試みたわけである。例えば、先に紹介した「猫一疋の力に憑って大富となりし人の話」や「さまよえるユダヤ人」、「マンドレイク論」などの論文において彼は、地理的に遠く離れた地に類話が伝えられている理由を考察し、東西の文化交流について論証している。

恐らく明治時代に日本で、東西文化比較を行ったのは熊楠ただ一人であったと言っても過言では無いだろう。つまり、熊楠だけが独占的に所有していた膨大な知識は、他の一般の日本人との間に、共通認識が成立し難いほどの隔たりを生む性質のものであっただろう。高等教育が今日ほど一般化していなかった当時の日本にあつて、熊楠の専門知識を、平易に解説することは、非常な困難を伴ったであろう。先に資料⑧として紹介した、熊楠が一般の人々に分り易く書こうと試みて、結局果たせなかった理由の一端は、熊楠が言文一致体に不慣れであったことにもあるだろうが、当時の日本人に、熊楠の考察を受け入れるだけの知的下地がなかったことも合わせて考えておく必要があるだろう。熊楠自身が「小生はもとより日本人を見切り、従前のごとく一意一つでも多く欧米にて出し置かんとす。」³¹⁾とか、「従来欧米で出せし自分の論文は到底今の邦人には向かぬものとあきらめ筐底に放置しあり（「燕石考」また然り）、おのれより劣ったものを相手にしては学問は進まず、智見は鈍り申すべく候。」³²⁾などと述べているのは、このことを物語っているであろう。

結 語

本稿では、従来から指摘されてきていた、南方熊楠の和文論文が断片的で、論理的構成を欠き、しかも難解である理由として次の3点を指摘した。

(1) 熊楠は20歳代に英国で、英文による文章修行を徹底して行い、英文による論文作法についてはかなりの程度通曉していた。従って、英文でなら了解しやすく、正統的なスタイルの論文を書くことが出来、実際多くの英文論文を発表している。ところが、帰国した当時の日本では未だ、西欧流の思想や概念を過不足なく表現出来るだけの語彙も、表現様式も確立されておらず、英文論文の場合と同レベルの論文を構成しようとする、語彙不足、表現法の未確立といった、様々な制約に直面せざるを得なかった。熊楠が、当時の日本で活発に行われていた汎用的文章作成の試みである言文一致運動と、ほぼ完全に無縁であったことも、それに拍車をかけていたと考えられる。

(2) 熊楠の認識としては、彼の本職は粘菌を中心とする植物学研究であり、民俗学は片手間と考えていた。このため、民俗学に多くの時間を割くことをあまり好まず、様式の確立していない日本語で、民俗学の研究成果を、人に分り易く示すという、膨大な時間と労

力を必要とすることが容易に予想される作業は、最初から敬遠していたと思われる。

(3) 明治期の日本には、熊楠の専門的知識を受け入れる知的土壌が未だ未熟であったため、彼の研究成果を人々に了解しやすく、順序だてて呈示するためには、膨大なエネルギーを要した。そこで彼はこれを諦め、研究成果は専ら英文で発表することとし、和文では彼の連想の赴く俣に、その膨大な知識を書き連ねるのみとすることになったと推測される。

熊楠の和文スタイルを決定していたのは、以上の3要因であると思われる。つまり、小林⁷⁾が指摘するように、熊楠は日本語でも論理的構成をもった論文が、全く書けなかったわけではない。しかし、定型的な作文様式をもたない当時の日本語の状況が障壁となって秩序だった了解しやすい論文とするためには、膨大な時間と労力を要する。このため、熊楠は和文論文では、彼の英文論文のように、論理的で秩序だった構成にすることを敬遠したものである。その意味では、近藤⁹⁾の指摘のように、熊楠には論理的な日本語は書けなかったと言っても、あながち間違いではないのかもしれない。

引用文献

- 1) 岩村忍 南方熊楠の英文著作 『南方熊楠全集』第10巻 所収 1973年
- 2) 赤坂憲雄 民俗学誕生のはざまに—南方／柳田論争をめぐる— 荒俣宏・環栄賢(編) 『南方熊楠の図譜』 青弓社 所収 1991年
- 3) 近藤俊文 天才の誕生—あるいは南方熊楠の人間学— 岩波書店 1996年
- 4) 益田勝実 野の遺賢 『南方熊楠随筆集』 所収 筑摩書房 1968年
- 5) 桑原武夫 南方熊楠の学風 飯倉照平・長谷川興蔵(編) 『南方熊楠百話』 所収 八坂書房 1991年 (初出『文芸春秋』1952年12月)
- 6) 鶴見和子 南方熊楠—地球志向の比較学— 講談社学術文庫 1981年
- 7) 小林武 言語としての南方熊楠 『現代思想』20巻7号 青土社 1992年
- 8) 南方熊楠 『南方熊楠全集』10巻, p131 平凡社 1985年 (以下『全集』と略記)
- 9) 松居竜五 形成期の南方学 『現代思想』20巻7号 青土社 1992年
- 10) 大正3年(1914年)4月14日 柳田国男宛書簡 『全集』8巻, p392
- 11) 大正3年『郷土研究』の記者に与うる書 『南方熊楠選集別巻 柳田国男 南方熊楠往復書簡』 p379-380 平凡社 1985年
- 12) 『全集』8巻, p508
- 13) 大正7年(1918)3月27日 上松翁宛書簡 『全集』別巻1, p35
- 14) 大正3年(1914)6月2日 柳田国男宛書簡 『全集』8巻, p437-438
- 15) 笠井清 『南方熊楠書簡抄—宮武省三宛—』 吉川弘文館 p17-18, 1988年
- 16) 『全集』8巻, p170
- 17) 『全集』別巻1, p35
- 18) 大正3年(1914)6月2日 柳田国男宛書簡 『全集』8巻, p439
- 19) 樺島忠夫 文章様式における制約と創造 宮地裕他(編) 『講座日本語学7 文体史I』 所収 明治書院 1982年
- 20) 森岡健二 素描・言文一致体の成立するまで 森岡健二(編著) 『近代語の成立 文体編』 所収 明治書院 1991年
- 21) 小池清治 日本語はいかにつくられたか? ちくま学芸文庫 1995年
- 22) 山本正秀 明治の文体革命 山本正秀(著) 『言文一致の歴史論考 続篇』 所収 桜楓社 1981年
- 23) 月川和雄 語学力 松居竜五他(編) 『南方熊楠を知る事典』 所収 講談社 1993年

- 24) 明治44年(1911)10月17日 柳田国男宛書簡 『全集』8巻, p194
- 25) 夏目漱石 「文章の混乱時代」 明治39年 『文章世界』 『漱石全集』25巻, p174-175 岩波書店 1996年
- 26) 『漱石全集』25巻, p220
- 27) 舛添要一 舛添要一の6カ国語勉強法 講談社 1997年
- 28) 昭和2年(1927)8月19日 上松蔭宛書簡 『全集』別巻1, p142
- 29) 大正6年(1917)3月15日 上松蔭宛書簡 『全集』別巻1, p15
- 30) 明治44年(1911)10月14日 柳田国男宛書簡 『全集』8巻, p178
- 31) 『全集』8巻, p165
- 32) 『全集』8巻, p165
- 33) 山本正秀 近代文体発生の史的的研究 岩波書店 1965年
- 34) 日本近代文学館(編) 日本近代文学大事典 第4巻 講談社 1977年

参考文献

- 中沢新一(編) 『南方民俗学』 河出文庫 1991年
松居竜五他(編) 南方熊楠を知る事典 講談社 1993年
松居竜五(著) 南方熊楠 一切智の夢 朝日新聞社 1991年
『南方熊楠日記』1巻-4巻 八坂書房 1987年-1989年

(平成10年11月11日受理)